

斧文山房のこと

國末泰平

もう先生に話しかけることもおたずねすることもできない。いくつかが報告しなければならぬこともあった。それらができないことが悲しい。いま私の机上に先生の書物が何冊がある。バラバラと頁をくってみる。つぎのような箇所があった。

聞きたくば、「私の作品にみんな盛つてありますからお読みなさい」と言うだろう。人間の胸の内、つまり「人間」は「作品」に内在し、人間と作品は有機的な共同体をなしているのである。（『日本文学と人間の発見』序 人間と文学）

古典の作者にどうせまるかの一節である。そのとおりである。先生には「作品」がある。九冊の歌集と多くの研究書である。おたずねしたいことの答えはそこに用意されている。そのことをわたくしたちはむしろしあわせに思わねばならぬだろう。私のつねにお世話になるのは『国文学概論』（昭56）と『芥川龍之介（昭31）』である。文字どおり座右の書である。

『国文学概論』は「斧文山房刊」とある。私家版である。「斧文」とは先生のお家が代々材木商をいとなみ屋号は「小野文」、父君が「文六」のなまえてあったことに由来するとお聞きした。もちろん先生のなりわいへのおもいがこめられているだろう。大

著『近代文学創成期の研究 リアリズムの生成』（昭48）の「あがき」には、文に「斧鉞」を加えるところがある。

『国文学概論』は薄緑色一五〇頁の本である。その中で古典から現代までが概観されている。まことに博学である。私がいつもひらく「第四章 日本文学の研究」の冒頭、「I 文学研究の意義」のところに次のように記されている。

古典の作者は、それぞれの時代を、最も誠実に生きぬいた人たちである。そこには、時代の現実との厳しい対決があったはずである。その作品は、その現実との対決によって生じる緊張感をエネルギーとして生み出されたものである。この緊張感は、現在、われわれがいまの時代に生きつつ体験しているところと響きあうであろう。この緊張感の共鳴において、古典は現代に生きると言わねばならない。

緊張していきなさいという先生のコエがきこえる。肝に銘ずるところである。

「日本文学の研究」は、「注釈的研究」「文献学的研究」等従来のさまざまな研究方法をふまえて「IX 現代の研究法」が説かれる。テーマの追求は、人物形象と結構からなされること、評価

はもつばら作者における真実と社会における真実の重視されるべきことなど作品研究の基礎がきわめて簡潔に説明されている。ことに作品を評価するものさしが作家的真実と社会的真実であるところが新鮮で普遍性をもつ。

『芥川龍之介』は芥川研究の古典でありつついまなお新しい。いつも参照させていただく。三好（行雄）くんの（『芥川龍之介論』）は僕の論にのっているよと先生は楽しそうにいつておられた。先生の芥川論の中心は作品のていねいなよみである。そのうえで、人物と結構とテーマと評価がさりげなく提示されている。さりげないなかで作品の核心がつかれている。先生は芥川のなかではとくに初期の作品を評価された。「羅生門」と「鼻」と「芋粥」が芥川の三部作だともいつておられた。もういちど先生は石川啄木と芥川にもどつてこられるはずであった（『近代文学創成期の研究』あとがき）。そこではあるいは芥川の晩年の作品を評価されたかもしれない。

広津柳浪研究会は和田邸「斧文山房」で開かれた。奥様にはいつもお世話になりました。第一回目が昭和五八年七月一三日と「広津柳浪研究」創刊号（昭61・3）に記されている。もう一五年以上昔になる。ときに府立ゼミナルハウスまででかけたり懇親会を「いろはかるた六角店」でしたことがなつかしい。

言語・文学の会の歴史もふるい。昭和四七年からもう三〇年近くなる。先生には昭和五十一年、「逍遙・龍溪の文体」の題でお話ねがっている。以後ずっとおいでいただいていた。一〇〇回目の

記念の会も先生にお願いした。平成三年であった。ついこの間のよくな気がする。題は「人間と文学」、言語芸術たる文学についてお話された。一三五回目の今年八月二八日の会が先生の追悼の会になった。

告別式の日、阪急桂駅から白川静先生とご一緒した。白川先生は和田先生、岡本彦一先生との交流について話された。和田くんは僕より三つ若いんだよ、六月の会にはきてくれるはずだった、あまりに突然で、といつておられた。和田先生のお家近く、あるじのなくなられた和田邸はさみしいですねという私に白川先生もあいずちをうたれた。弔辞で白川先生は三人の先生方の交流が実に六五年にわたつていたと述べられた。

「ポトナム」にこんなうたがのっている。

卓上のほこり拭えば美しくなりぬ
 そこまではいともたやすし
 （平11・4）

先生のユーモアである。先生は私のことを「くになえくん」となぜか「す」をにごつてよばれた。拙著の序文に、研究に完成はない、さらに芥川文学の深奥を究めなさいとのことばをいただいている。くになえくん、そこまではだれにでもできる、もつと勉強しなさい、もつと仕事をしなさい、とはげまされている気がする。靈前に精進を誓いたいと思う。

（くになえ・やすひら 園田学園女子大学教授）